

ペテロ第一5章「恵みの中にしっかりと」

1A 牧会において 1-4

2A 若者のへりくだり 5-7

3A 悪魔への抵抗 8-11

4A 神のまことの恵み 12-14

本文

ペテロ第一 5 章を開いてください。私たちのペテロ第一の手紙の学びは、これで最後になります。教会外からの迫害で、苦しみ始めたアジア地方の兄弟たちがいます。そしてこれから、一段と激しい迫害と殉教が迫って来ることを、皇帝ネロのキリスト者迫害の渦中にいたペテロが、前もって備えるように伝えています。その中で、しっかりと恵みの中に立っているように勧めます。

1A 牧会において 1-4

恵みの中にしっかりと立っているために必要なのは、教会でしっかりと養いを受けることです。また、整えられることです。そのために必要なのは言うまでもなく、牧者らの働きです。同じ長老として、ペテロが牧者たちに勧めます。

¹私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じ長老の一人として、キリストの苦難の証人、やがて現される栄光にあずかる者として勧めます。

「長老」は、旧約聖書、また新約聖書においても数多く出てきます。旧約時代においては、モーセがイスラエル人たちをエジプトから連れ出し、荒野の旅を導きました。その中でいろいろな問題が発生します。その仲裁と調停を、モーセ一人で行なっていました。しかし、モーセの舅であるイテロが、「民全体の中から、神を恐れる、力のある人たち、不正の利を憎む誠実な人たちを見つけ、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長として民の上に立てなさい。(出 18:21)」と言いました。それでモーセは、言われたとおりに民のかしらを選びましたが、彼らが長老でありました。治めることのできる人です。ですから新約聖書においても、教える能力があり、誠実で、神を恐れる人が指導者となり、彼が「長老」と呼ばれます。

そしてペテロは、「同じ長老の一人として」勧めています。ここに、ペテロの謙遜さが表れています。彼は、イエス様から、天の御国の鍵が渡されるとして指名されました。使徒の働きを見れば、ペテロが教会において、指導的な、第一人者的な働きをしていることが分かります。しかし、彼は自分を他の長老たちの上に置きませんでした。あくまでも、同じ長老の一人として話しています。

私は、このへりくだりは、彼が失敗を通して学んだからだと思います。この第一の手紙に、ペテロがイエス様から言われた言葉が貫かれています。「ルカ 22:31-32 シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」自分が派手に失敗した後で、主に立ち直った後、兄弟を力づけているのが、この手紙といっても過言ではありません。

ペテロは、ことごとく自分の力や知恵では、何もできないことを学びました。そして、イエス様が復活後、再びペテロを呼ばれて、以前は、「人をとる漁師にする」と言われましたが、「羊を飼いなさい」と言われて、牧者として召したのです。彼が長老となっているのは、神の恵み以外の他はないのです。彼は、この手紙全体で神の恵みの豊かさを語っています。彼自身が分かっています。自分は、神に見捨てられて当然の身であると。しかし、イエス様に豊かに赦され、再び呼ばれて、この働きに携わっているのです。この恵みがあって奉仕の働きをしています。

そこで次に、「**キリストの苦難の証人**」と言っています。今、話したように、ペテロは、主を三度も知らないと言いましたが、それは、主がカヤパ邸で、裁判を受けている時のことでした。不正な裁判でありました。主は平手で打たれていました。その苦しみを見ていました。彼の目には、自分もこの方の苦しみにあずかるのであれば、それは恐れ多いことであり、恵みに他ならないと思ったのです。私は、果たして、このへりくだった態度を取れるだろうか？と思います。イエス様のために働いていて、苦しみを受けるということは、この正しい方に共にいる者としてみなされているのです。これは、大いに光栄なこと、恐れ多いことです。

そして、「**やがて現される栄光にあずかる者**」と言っています。これは、主が再び来られる時の現れです。その栄光の現れにあずかることができるのです。第二の手紙では、彼はその前触れを目撃したことを証言しています。高い山に、ヨハネとヤコブと共に連れられて、そこで主の御姿が光り輝いておられたのを見ました。主の栄光の現われは必ずあることを確認しています。そしてこれが、ペテロが第一の手紙ですと話している事であり、大いなる恵みであります。その時が来るまで、しっかりと、忠実に、羊を飼いなさいと勧めているのです。

² あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って自発的に、また卑しい利得を求めてではなく、心を込めて世話をしなさい。

ペテロは、先に長老と言っているのに、どうして牧しなさいと言っているのでしょうか？新約聖書では、同一人物として語られています。パウロが、エペソにいる教会の長老たち(使徒 20:17)に、語りました。「20:28 あなたがたは自分自身と群れの全体に気を配りなさい。神がご自分の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、聖霊はあなたがたを群れの監督にお立てになった

のです。」長老たちに対して、神の教会を牧しなさいと命令し、かつ「監督」にお立てになったとも言っています。ここペテロ第一 5 章 2 節でも、日本語訳には出て来ませんが、本当は「心を込めて監督しなさい」と書いてあります。

つまり、長老、牧者、そして監督が、いわゆる役職ではなく、あくまでも「働き」であることをよく表しています。長老ということは、教会を治めるという働きを指しています。そこには成熟さが問われます。そして監督は、その文字通り教会全体を監督しています。全体を見て回っています。そして牧者は、教会の人々を養い、世話し、守り、導く働きをします。

牧する相手は、「神の羊」です。自分の羊なのではありません、神の羊です。イエスが、いかようにして信者たちが神の羊であるかを教えておられます。「ヨハネ 10:3-4 門番は牧者のために門を開き、羊たちはその声を聞き分けます。牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します。羊たちをみな外に出すと、牧者はその先頭に立って行き、羊たちはついて行きます。彼の声を知っているからです。」イエスの声と、そうでない人の声とを聞き分けることができます。そういった、イエスの声を聞いている羊の群れが、自分に割り当てられて与えられているのであり、その群れを牧しなさい、と命じられているのです。

そして「牧する」という言葉についてですが、長老と同じく、旧約時代から新約までずっと出て来る言葉です。ダビデが主に愛されていた、その理由は、「彼は全き心で彼らを牧し 英知の手で彼らを導いた。(詩篇 78:72)」からであるとあります。エゼキエル書には、その反対に、イスラエルを牧していない指導者たちに対する神のさばきが書かれています(32:4-5)。彼らが、羊を養うのではなく、かえって羊を屠って、食べてしまっていることが書かれています。そして新約聖書でイエスは、ペテロに対して、「羊を飼いなさい。」と言われました。

牧者の働きは、その主要なものは「養う」ことです。羊を食べさせないといけません。これを、教会の指導者は、霊の食べ物である御言葉によって行ないます。それから、「世話をする」ことがあります。祈り、気にかけて、具体的な助けも与え、また助言も与えます。そして、人生の分岐点になるようなところで共にいるということも、含まれるでしょう。それから、「守る」ことがあります。羊はいつも狼に狙われています。偽りの教えや行動、こういったものが教会にも入り込みますが、力をもってそれを阻止します。見張っています。そして、「導く」ことがあるでしょう。けれども羊がそうであるように、それほど遠くのところを見られるわけではありません。方向性を示すと同時に、足並みを揃えて示していく必要があります。

そして、「強制されてではなく、神に従って自発的に」しなさいと言っています。牧者は、まず、ペテロと同じように、主に呼ばれている必要があります。神に従うのです。ただ、主に呼ばれているからという理由で行います。だから、「自発的」なのです。ゆえに、強制されて行ってはいけません。

自ら進んで行っているのです、そこには喜びがあります。もちろん、そこには労苦があります。けれども、子どもを育てているように、喜びがあるのです。ある方と話していたら、その人は自分の子どもたちは、もう巣立っているのに、里子を受け入れました。それはそれは、もう大変です。けれども、そこに喜びがあります。自ら進んで行っているからです。

それから、「卑しい利得を求めてではなく、心を込めて世話をしなさい。」と勧めています。牧会者が世の中でいう安定した職、雇用先であるかのように考えていくことは決してしてはいけないことです。私は、何度か聞かれたり、期待されたことがありました。それは、「教会で働いたら、いくらもらえるのか？」という質問です。まるで、勘違いをしています。使徒パウロは、福音宣教者が物質的なことで支えられることは、御心にかなっていると教えました(1コリント9:1、1テモテ5:17-18)。このことについて、教会はないがしろにしてはいけないのですが、この権利をパウロは、状況に合わせて放棄している姿も見ます。彼は天幕作りとしていました。福音宣教に、利得は関係ないからです。給料の出る就職先ではないのです。むしろ、自分の手で働いてでも、献げ、与えるものなのです。これが、「心を込めて世話をする」という意味です。

³ 割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。

イエス様が、仕えることについて教えられましたね。「マル 10:42-43 あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者と認められている者たちは、人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています。しかし、あなたがたの間では、そうであってはなりません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。」支配するのではなく、仕えます。イエス様は、弟子たちの足を洗われて、その模範を示されてから、「互いに仕え合いなさい」と言われました。

カルバリーチャペル・コスタメサで、このことをしっかりと教わりました。私が通っていた、スクール・オブ・ミニストリーでは、いわゆる牧師たちの卵のような男たちが学んでいます。彼らは同時に、教会での雑多な奉仕にも携わります。ある時に、教会の事務室の瓦になっている屋根で、作業をしなければいけませんでした。その学校の校長である、牧者カール・ウェスタランドさんがそこにいたのですが、なんと、我々学生を置いて、勝手に自分でよじ登って作業を始めるのです。言いつけられるのを待っていたのに、彼についていけないといけませんでした。その出来事で、「支配するのではなく、群れの模範となりなさい」を学びました。自分自身が主に従うことによって、その姿を見て、人々が主に従うことができるようにお手伝いするのです。

⁴ そうすれば、大牧者が現れるときに、あなたがたは、しばむことのない栄光の冠をいただくこととなります。

牧することをしっかり行なっていく心の動機というのは、ここにあります。自分たちは牧者なのですが、同時に、羊であるのです。ですから、イエスを大牧者として仰いでいます。

この方が再臨される時に、私たち一人一人は栄光にあずかります。栄光の冠を受ける、報いを受けるのですが、ここに牧会をする動機があるのです。人を喜ばせるのではなく、主を喜ばせることに焦点を当てます。主に仕えることにおいての、大原則です。人をみな、喜ばせることはできません。ただイエスを喜ばせていけばよいのです。

2A 若者のへりくだり 5-7

⁵ 同じように、若い人たちよ、長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与えられる」のです。

キリスト者が苦しみの中にあって、しっかりと信仰に立つことをペテロが勧める中で、しっかりとした牧会が一つにありました。次に、そうした指導にきちんと従うということがあります。大事なものは、「同じように」という言葉です。長老は、大牧者であられる主に仕えるというところにおいて責任があります。そして若い人たちは、長老の指導に従いながら主に従うというところにおいて、責任があります。ここでの「若い人」というのは、経験が少ないということです。実際の年齢が若いということもありますが、それ以上に信仰的なことです。テモテ第一 3 章 6 節に、監督は「信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないようにするためです。」とあります。

再び、これはペテロ自身が通った道です。彼は、主の恵みにあずかる前は、たとえ他の人がイエス様を見捨てても、自分は死ぬまでついていくと言いました。けれども、女中などに問われただけでも、三度も主を知らないと言いました。それで、自分自身がいかに頼りないかを、経験によって知ったのです。信仰的に若い時は、その経験が少ないので、自分ではできるとしてしまいます。けれども、何もできないことを知るからこそ、主の恵みによって、奉仕の働きができるのです。そこで、主は復活されてから、ペテロを再度、召して、羊を飼いなさいと言われた後に、こう言われました。「ヨハ 21:18 まことに、まことに、あなたに言います。あなたは若いときには、自分で帯をして、自分の望むところを歩きました。しかし年をとると、あなたは両手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をして、望まないところに連れて行きます。」若い時は、自分のしたいことが前面に出てきました。けれども、年をとると、主が命じられたところに連れて行かれます。これが、成熟さの現れです。

「みな互いに謙遜を身に着けなさい」と勧めています。これがこの手紙の全体に貫かれている考えです。すべての人を敬いなさい。人間の制度に従いなさい。主人に従いなさい。みことばに従わない夫であっても、無言のふるまいによって、神にものになるようにしていきなさい。それから、人々に悪口を言われても、自分の希望について語る機会が与えられたら弁明しますが、「ただし、

柔和な心で、恐れつつ、健全な良心をもって弁明しなさい。(3:16)」と勧めています。

ところで、謙遜とは、自分を卑しめることではありません。自己卑下する人は、とても高ぶっていることは多々あります。「私は本当にだめな人間だ」といつも言っていて、周囲の人が「そうだね、本当にダメな人間だね。」と言われたら、怒り出すとか。謙遜とは、主のゆえに、他者のことを気にかけていて、自分のことを忘れてしまっている状態です。他者を敬い、神を恐れ、神と人に関心があるので、自分のことはどうでもよくなるのです。そして自分自身については、「神の恵みによって救われて、罪赦された者です。主のしもべにしか過ぎません。」となります。

そして、箴言 3 章 34 節を引用していますね、ヤコブも 4 章 6 節で引用しているものですが、オリジナルは、「嘲る者を主は嘲り、へりくだった者には恵みを与えられる。」とあります。神の恵みを知るためには、へりくだりが必要です。恵みを受け入れるのは、自分をへりくだらせないとできません。恵みとは、自分の行なっていることは全く評価されないからです。自分は霊的な乞食だからこそ、神のしてくださることを恵みとして受け入れることができます。

⁶ ですから、あなたがたは神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神は、ちょうど良い時に、あなたがたを高く上げてくださいます。

長老に従い、互いに謙遜にするということは、人々の背後にある神の主権を受け入れなさい、ということです。長老に従えない人は、その人が恵みによって主が立てておられるということを受け入れられないからです。その人に欠点があると指摘するのですが、そもそも、主は完璧な人を選ばないことを忘れていたのです。あくまでも恵みによって、立たせるのです。そして、互いに謙遜になるということができない人は、その相手が主によって置かれている人なのだ、ということを受け入れられないからです。しかし、その背後に「神の力強い御手」があるのですね。

そして従うところに、神ご自身の主権で、高められるのです。イエス様が最後まで神に従順であり、しもべとなっておられましたが、ゆえに神がイエスを引き上げ、天に昇らせ、右の座に着かせてくださいました。全て主なる神が行なわれていることです。

そして、「ちょうど良い時」とあるように、時を神は支配しておられますから、自分も高められるのです。信仰者は、神がちょうど良い時に用いられます。モーセが 80 歳の時に用いられました。ヨセフは、30 歳になって囚人の身からエジプトの宰相となりました。ダビデもサウルに追われて、そして自分の手を血で汚すことなく、イスラエルの王となりました。時が、その人の信仰を練り清めます。なぜなら、時は神のもの、神の主権の領域だからです。

⁷ あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださる

からです。

今、ペテロは、神の恵み、そして神の時について、神を信じて他のことは任せるという、まっすぐな信仰を求めておられます。思い煩わないということです。

「いっさい神にゆだねなさい」というのは、投げてしまいなさい、というのがギリシア語の意味です。いわゆる、日本語の「丸投げ」です！丸投げをするのは、悪い意味で使われますね、日本人はとかく責任感が強いからです。人には丸投げはいけないですが、私たちの神は、私たちの必要をすべて知っておられる父です！すべてを心配してくださる方です。だから、悪いことではなく、このように勧められているのです。

3A 悪魔への抵抗 8-11

そして次に、ペテロは手紙の最後に、キリスト者として襲いかかる激しい迫害について、力強い勧めをします。

⁸ 身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、吼えたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。

4章において、万物の終わりが近づいていることについて、「祈りのために、身を慎みなさい」と勧めていました(7節)。敵である悪魔が食い尽くそうとしているところで、同じ勧めを行っています。酔わないで、しらふでいることが元々の意味です。そして、「目を覚ましていなさい」と言っていますね。これは、自分自身が身を慎むことを怠り、眠ってしまっていたために、悪魔の餌食になったのを思い出しているかもしれません。

ペテロは、主が、ご自身が十字架につけられて、三日目によみがえることを初めて語られた時に、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」と言いました(マタイ 16:22)。すると主は、「下がれ、サタン。」と、はっきりと言われたのです(16:23)。十字架につけられるなんていうことは、あってはならない！というのは、尤もな感情であり、意見ですね。けれども、イエス様は、「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」と言われました。人のことを思って、いかにも良いように見えるところに、悪魔は虎視眈々と働いて、ペテロの心に神のことを思わなくさせたのです。

イエス様は、ご自身を捕えに来た者たちに対して、「ルカ 22:53b しかし、今はあなたがたの時、暗間の力です。」と言われました。十字架につけられるまでの、彼らの陰謀には、暗間の力が確かに背後にありました。同じ闇の力が、何とかして、天の御国の鍵を渡されたペテロをつまずかせ、その信仰をなくそうとしていたのです。それで、イエス様は前もって祈っておられました。「ルカ

22:31-32 シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

みなさんは、罪を犯してしまった時に、自分自身がつぶれてしまうのではないかと悩み、悲しんだことがあるでしょうか？もう、キリスト者として生きていけないのではないかと押し潰されてしまいそうになります。そこから、主の憐れみを受けて立ち直ることは、とても難しいことです。靈的に傷を受けてしまった自分が、それが癒えるのは、徐々にいわば、靈的にリハビリをしていかなければいけません。ペテロは、その痛みを経た人です。思えば、旧約時代において主に選ばれた、ダビデも、その痛みを経た人でした。彼が王として栄えていた時に、他人の夫の妻を奪い取り、夫を殺す罪を犯しました。主は赦されますが、そこからの立ち直りには時間がかかります。

このようにして、私たちの敵である悪魔は、虎視眈々と狙っています。傷つけるだけでなく、食い尽くそうとさえします。ところで、まだ福音を信じていない人たちは、悪魔は敵ではありません。むしろ、悪魔は自分の支配者であり、悪魔の言っていることにそのまま従っているので、敵対しないのです。福音を信じた者たちは御子の支配に移されたので、神の御名を貶めるべく、なんとかして、引きずり降ろそうとするのです。悪魔は、人々に罪を犯すように仕向けます。それは、ダビデのように状況が良い時に誘惑する時もありますが、ペテロのように、迫害を恐れて、自分を守るために主を否定するような時にも働いています。

ここでは具体的には、迫害の背後にいる悪魔のことを語っています。まだ、アジアの地方にいる彼らは、いやがらせを受ける程度の困難でしたが、ペテロのいるであろうローマでは、キリスト者は文字通り、競技場などで、生きた獅子に喰い殺されて殉教していたのです。

⁹ 堅く信仰に立って、この悪魔に対抗しなさい。ご存じのように、世界中で、あなたがたの兄弟たちが同じ苦難を通ってきているのです。

ペテロが試されたように、悪魔が妨げようとしているのは、信仰とその告白であります。自分が主イエスを信じ、信じるだけでなく、人の前でもそのことを表明することです。人々の前で示せてこそ、初めて悪魔に対抗できます。「黙示 12:11 兄弟たちは、子羊の血と、自分たちの証しのことばのゆえに、竜に打ち勝った。」

そして、この信仰を堅く抱いていることが、奨励されています。どのようにして、堅くしているのか？それは、どんな圧力がかけられても、意固地になってその信仰の立場を表明することです。代表的な模範が、ダニエルの三人の友人です。彼らは、ネブカドネツアル王の造った金の像に、ひれ伏すことを拒みました。王が怒り狂って、彼らを自分の前に立たせました。そして、燃える火の

炉に投げ入れると脅しました。ところが、彼らは答えます。「ダニ 3:16-18 シヤデラク、メシャク、アベデ・ネゴは王に答えた。「ネブカドネツアル王よ、このことについて、私たちはお答えする必要はありません。もし、そうなれば、私たちが仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ、あなたの手からでも救い出します。しかし、たとえそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々には仕えず、あなたが建てた金の像を拝むこともしません。」ここにある大事な点は、第一に、彼らは神へ信頼したことです。救うことがおできになると信じていました。第二に、たとえ救われなくとも、それでも神々には仕えないと決心しているのです。

この、決めてしまうとうのが、信仰を堅くすることに大事な点です。結婚についてのアドバイスで、結婚するまでの決断は、直前まで悩むことがあるでしょう。けれども、結婚式で誓約しました。その後、「この人で良かったのかな？」と悩むことは、最もやっていけないことです。結婚式で、神の前で交わしている誓約ですから、神が二人を一つにされたのであり、神はたとえ二人がどんなに性格が違っても、二人の絆を深めてくださるのですか、心配しなくてよいのです。むしろ、心配していること自体が、どんなに神が祝福しようとしても、その祝福は決してやってこないのです。それと主への信仰は同じで、自分がキリストに従うと決めてしまっていて、どんな時でもこの方を主とすると決めているからこそ、どんな反対の力、敵対する力がやってきても、対抗する力が与えられます。

そして、「世界中で、あなたがたの兄弟たちが同じ苦難を通過してきているのです」と言っています。これは慰めの言葉です。自分たちだけが特別なのではない、他にも苦しみを通過している兄弟たちがいるのだということを知るのです。試練は世の常でないものはないのです。

¹⁰ あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあって永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみの後で回復させ、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。

午前礼拝でこの箇所を説き明かしました、どうか後で聞いてください。この手紙の内容のまとめのようになっている箇所です。第一に、ペテロは、一貫して「恵み」を語っています。「あらゆる恵みに満ちた神」と言っています。その中で、苦難に耐えることができます。手紙の冒頭で、キリストの血潮を注がれるように選ばれて、新たに生まれ、天における資産を受け継ぐ者とされたことが書かれています。そして、「永遠の栄光」の中に招き入れられています。これもペテロは初めから強調していました。主の再臨の時に、信仰が賞賛と光栄と栄誉に至るということを語りました。

そして、「あなたがたをしばらくの苦しみの後で回復させ」と言っています。キリスト者にとって、苦しみは、永遠の栄光に召されているので、それは一時的なものです。そして、苦しみは私たちが、キリストに似た者として整えられるのを手助けするしかないのです。パウロも同じことを、話しました。「ロマ 5:2-4 このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れ

られました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいますが、それだけではなく、苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。」

そして回復させた後に、「**堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます**」とあります。壊れかけた家を修復して、その修復した部分を補強するのが**堅く立たせる**ことです。そして強化して、それから土台をしっかりと据えているので**不動**になります。こうしたことを、あらゆる恵みに満ちた神が、永遠の栄光へと私たちを導かれるにあたって、苦しみと共に変えていってくださいなのです。

¹¹ どうか、神のご支配が世々限りなくありますように。アーメン。

主の永遠の栄光、その支配が続くことを願う祈りを、「**頌栄**」と言います。こうした信仰の姿によって、主のご支配が続いていることを示すことができます。

4A 神のまことの恵み 12-14

¹² 忠実な兄弟として私が信頼しているシルワノによって、私は簡潔に書き送り、勧めをし、これが神のまことの恵みであることを証しました。この恵みの中にしっかりと立っていなさい。

手紙のしめくりに入っています。シルワノは、使徒の働きにおけるシラスのことです。パウロの第二宣教旅行において、彼と同伴しました。パウロと共にピリピの牢獄に入れられて、その苦しみの中で祈りと賛美を献げていました。そして地震が起こって、その牢の看守とその家族がイエスを信じて、バプテスマを受けました。今、シラスが、ペテロはこの手紙を書くときに、筆記をしていたようです。彼を「**忠実な兄弟**」と言っています。これが奉仕者の資質です。

そして、「**これが神のまことの恵み**」と言っています。ペテロは、権威をもって、神のまことの恵みを証しました。他に、いろいろな教えがあっても、私の伝えるのは、神のまことの恵みなのだと宣言しています。

そして、「**この恵みの中にしっかりと立っていなさい**」と言っています。この勧めが、この章で、いやこの手紙全体で最も大事な勧めです。恵みにしっかりと立ちます。ペテロが、自分がことごとく失敗しながらも、恵みを受けて、それで今、指導者として立っています。恵みに立ち続けるのです。私たちは、神の恵みに着いて考える時に、過去に救われた時の恵みは確かだと思えます。そして将来、天に招き入れられる恵みも確かだと考えます。けれども、それは私がしばしば呼ぶ、「天国教」と呼ばれるものです。まことの恵みは、たった今、注がれているのです。今のあなたにも、恵みが注がれています。そこに留まるのです。

¹³ あなたがたとともに選ばれたバビロンの教会と、私の子マルコが、あなたがたによろしくと言って
います。

この「バビロン」ですが、これは二つの解釈があります。実際のバビロン、すなわち現在のイラクの地域であるということと、もう一つは、ローマということです。ローマでの迫害を受けていたので、直接書かないで、暗示的に書いているという可能性があります。私は、ペテロがローマにいる、つまり、バビロンはローマの暗示の言葉ではないかと思います。

そして、「マルコ」は、あの福音書を書いたマルコですが、ペテロは彼を「私の子」と呼んでいます。歳でも親子のような差があったでしょうし、また、マルコはいつもペテロといっしょにいたと考えられます。パウロがテモテを私の子と言っているのと似ていますね。マルコによる福音書は、ペテロが何度も語ったことを書いたと言われていました。マルコは、その福音書の中で、イエスが捕らえられるとき、裸のまま逃げた少年ではないか？と言われていました。

¹⁴ 愛の口づけをもって互いにあいさつを交わしなさい。キリストにあるあなたがたすべての者に、
平安がありますように。

愛の口づけとは、もちろん恋愛の口づけではありません。現在でも中東では、あいさつとしてほおに口づけします。親愛のしるしです。あなたがたに、平安がありますように、ではなく、「キリストにある」あなたがたに、平安がありますように、となっています。キリストのうちにあって、初めて平安があります。そしてその平安は、キリストのうちにいるすべての者に共有されています。

今回はペテロの第二の手紙です。ついに、パウロと同じく、ペテロも皇帝ネロによって死刑にされる直前に書かれたものではないかと思うものです。